

## 自らの考えを深め合う作文学習 —学習参加者の対話による再構成—

佐藤 康 (伊勢崎市立境南中学校)

### 1. 実践の場の特徴

本実践は、学習参加者の対話を通して、日本語の指導を必要とする生徒が自らの考えを深め合うことを目指したものである。ここで学習参加者とは、日本語指導を必要とする生徒3名(生徒A・B・C)と日本語教室で日本語指導に当たる教師2名(T1・T2)を指す。生徒3名は、中学校1年で同じ在籍学級に属するが、国籍や母語環境、在学年数、日本語力等は異なる。生徒Aは、ブラジル国籍・ポルトガル語が母語、日本の小中学校への在籍が6年目であり、作文学習では資料を基に短い作文の原稿を書くことが課題である。生徒Bは、ボリビア国籍・スペイン語が母語・在籍が6年目で、モデル文を基に複数の段落から成る文章を書くことが課題である。生徒Cは、フィリピン国籍・タガログ語が母語・在籍が1年目で、モデル文や表現例を基に短い文を書くことが課題である。なお、教師1名(T2)は、ポルトガル語・スペイン語の母語話者である。

普段は、在籍学級における週4時間の国語科授業中、生徒A・Bは1～2時間、生徒Cは3～4時間、日本語教室で学習している。その内、1時間は同じ時間帯に3名が日本語学級で、内容に応じ、個別の学習や協働での学習等を行っている。今回は、根拠を明確にしてよさを伝え合う作文学習(6時間)について、国語科部会と連携して、課題把握・追究の過程は日本語教室において協働で学習し(4時間)、発表・交流の過程は在籍学級において学習する(2時間)という計画を設定した。

### 2. 実践の目標

実践の目標は、学習参加者の対話による再構成を通して、生徒が自らの考えを深め合うようにすることである。具体的には、実態を踏まえた個別の指導計画に基づき、生徒Aは「資料をもとに短い作文の原稿を書くこと」(自力で到達を図る「目標Ⅰ」)と「ある程度の長さで構成を考えて文章を書くこと」(協働で到達を図る「目標Ⅱ」)を学習目標に設定した。生徒Bは「モデル文をもとに複数の段落から成る文章を書くこと」(目標Ⅰ)と「より幅広い内容でまとまりのある文章を書くこと」(目標Ⅱ)を設定した。生徒Cは「モデル文や表現例をもとに短い文を書くこと」(目標Ⅰ)と「よく知っている話題について複数文をかくこと」(目標Ⅱ)を設定した。

### 3. 具体的な実践の内容とその過程

具体的に、「課題把握」・「課題追究」・「つなぐ」という3つの過程を経て実践した。まず、「課題把握」過程では、生徒が「よさを伝える作文を書く」という単元の学習目標をつかむとともに、「学習の要点」(本単元で学習する基本表現と自分らしい表現の文例)を読み、学習の見通しを持つようにした。

また、「課題追究」過程では、①基礎的基本的知識・技能の習得を図る「精読」過程、②思考・判断・表現力等の育成を図る「多読」過程及び③「表現」過程という3つの過程を設定し、学習参加者間で対話・交流をしながら、生徒が追究を深めることができるようにした。①「精読」過程では、生徒は「モデル文1」(基本表現と自分らしい表現を活用した作文例)を読み、作文メモの全部または一部に要点をまとめていた。②「多読」過程では、「モデル文1」と「モデル文2」(「モデル文1」と別観点の作文例)と比べて読み、新しい観点を発見していた。③「表現」過程では、自分の知識や経験等に重ねて、よさを伝える作文を書いていた。

「つなぐ」過程では、在籍学級で発表・交流会をしたり、家庭や地域等で発表して保護者等からの感想を持ち寄ったりする等、日本語教室での学習を在籍学級や母語・母文化とつないでいた。

#### 4. 結果と考察

生徒 A は、「課題把握」から「精読」の過程で、「学習の要点」や「モデル文 1」等を精読し情報の取り出しや解釈・編集をしながら、作文メモに自力で要点をまとめることができていた。「多読」の過程では、「モデル文 1」と「モデル文 2」を比べて読み、「見る・聞く」という新しい観念に気付くことができていた。「表現」から「つなぐ」過程では、自分の知識や経験を重ねて熟考・評価を行い「見る・聞く」という観念について独自に表現することができていた。全過程における学習参加者間の対話を通して、自力で到達を図る「目標 I」については、「～のよさは～と私は考える」・「まず～また～そして～このように」という基本の表現と「近くに誰がいるのだろう」「絶対このボールをつなぐ」という自分らしい表現を合わせる等、資料をもとに短い作文の原稿を書くことができていた。また、協働で到達を図る「目標 II」については、「家族でサッカーの試合を見たり応援の声を聞いたり」と自分の知識・経験と結び付けたり、「サッカーのよさは」「知識が伸びる」(第 1 段落)・「精神力が強くなる」(第 2 段落)・「見る、聞く力が伸びる」(第 3 段落)と構成を工夫したりする等、ある程度の長さで構成を考えて文章を書くことができていた。

生徒 B は、「課題把握」から「精読」の過程で、「学習の要点」や「モデル文 1」等を精読し、教師(T1)の指導を適宜受けながら要点をまとめることができていた。「多読」の過程では、「モデル文 1」と「モデル文 2」を比べて読み、「人の表情」のように見えるものに新たに注目することができていた。「表現」から「つなぐ」過程では、「走り、走り続けて」のように自分らしい表現をすることができていた。全過程における学習参加者間の対話を通して、自力で到達を図る「目標 I」については、「まず～また～そして～このように」という基本の表現をよく理解して自らの作文に使っている等、モデル文をもとに複数の段落から成る文章を書くことができていた。また、協働で到達を図る「目標 II」については、「私のおじさんは、ボリビアのブルーミンというチームに入っています」と自分の家族の内容を書き加える等、より幅広い内容でまとまりのある文章を書くことができていた。

生徒 C は、「課題把握」から「精読」の過程で、教師(T2)の指導を個別に受けながら「学習の要点」や「モデル文 1」等を音読し、作文メモの一部分に記入することができていた。「多読」の過程では、「モデル文 2」も読み足して、「人々のこと」も書き加えるという新しい観念を持つことができていた。「表現」から「つなぐ」過程では、自分の経験を重ねて「フィリピンで一緒に練習した友だち」についても書き加え、表現を深めることができていた。全過程における学習参加者間の対話を通して、自力で到達を図る「目標 I」については、「バスケのよさは、ドリブルがあることだと、私は考えます」・「まず～また～そして」という基本の表現をしっかりと使う等、モデル文や表現例をもとに短い文を書くことができていた。また、協働で到達を図る「目標 II」については、「ドリブルは敵のカットに負けないで、攻めき力を強くします。」「レイアップはいろいろなポジションからできます。」と自分らしい表現を書き足す等、よく知っている話題について複数文を書くことができていた。

#### 【参考文献】

伊勢崎市教育研究所(2016)「伊勢崎市 日本語ステッパーひろがることば・夢・希望」  
古川敦子・小池亜子・佐藤康他(2016)「外国人児童生徒のことばの力を見取る共通指標『日本語ステッパー』の開発」群馬大学国際教育・研究センター論集第 15 号、pp.49-62